青木輔清著

脩身女大學

全

143
5
104

K110.1
58

B 1
70

青木輔清著

脩身女大學

類 教育
屬 女訓
冊 一
函 四

東京 書肆 正榮堂梓

以順爲正
者妾婦之

道也

半額中根聞題

明治十二年九月十二日登録

脩身女大學

上編

青木輔清　解述

第一　父母に事る事

凡女子たる者ハ別して物菜き代吉ゝ朝ら早く起て先づ父母の寢室に至り安否を伺ひ問ふべし寒き日ハ衣服を温めて暖め熱きときにハ枕席を扇きて涼を以て餘ればハ食を進め渴きれバ湯を進むる等ハ吏各々其宜きに

適ふを常とすべし父母の言語も平常なるも必ず麁略に聞ちがへ勿れ況や訓誨を加へ玉ふことなるをや此ハ尚更丁寧ゐ其教ゐ遵ひ必違背なるかと勿れ若し又已れ過失あるて父母乃譴責を蒙ることなるこれも従容其仰に従ひて朝ゐ夕に父母の嗔責を免んかと欲し工夫し専ら過を改め善ゐ遷るかと欲し注意すべし父母若し年老るこれも一にハ高年長寿を得玉ふこれ喜ひ一

にハ其余年ハ多くなることこれ憂ひて飲食も必ず甘美を盡し衣服ハ必ず軽暖をいたし其外心配かと欲耳を入れ楽事を厚くして百事缺乏母ら〳〵むべし父母若し疾病あるこれも朝暮側らを離れず肩をさすり足を揉み夙ゐ夜に憂ひ懼て神祇ゐ禱り薬餌を進め速に快復あるかと欲希ひ望むべし若し不幸にして死亡ゐ至ることきも哀痛愁歎すべし又葬送或い祭祀を行ふ

とゝはいかゝなる誠敬の心を盡して常に父母乃恩德を忘るゝことなく忌日追膳に遇ハ殊更追ひ慕ひて哭泣するこゝ生るゝ事ゝ如くすべし是を生吏に力を盡し死事ハ思を盡ス者と以ふべし

第二舅姑に事る事

凡女子出て人ゝ嫁するゝハ舅姑ハ乃ち夫の父母ゝ一家の主たる者ゆゑ貴賤貧富に拘らズ能く婦法礼を守りて恭く敬ひ其仰に從ふべし亦方ゝ父母に事る如くすべし大凡舅姑の前ゝ立るゝハ眉を低し氣を下して面貌を仰き視ること勿し語言ハ玉ふゝ聲なるゝハ敬んで應答すべく又使令ハ玉ふゝ所ハ聽從して違ひ逆ふゝと勿し毎旦起れハ必ず門を開き戸を明け庭堂を洒ぎ掃ひ落度なく潔淨ゝなすべし高言大聲して舅姑の熟眠を驚ス事と勿

正樂堂藏版

舅姑起きて面を洗ふられハ盤を捧ぎ巾を進
免楊枝齒磨を捧ぐ〳〵盥漱し畢らバ乃ち飲食
を供へ膳椀箸等を清潔にし飯ハ軟ふ煮肉ハ熟
く蒸し茶ハ香〳〵して潔くし然して後に奉勸を
〳〵夜既に深しと雖も舅姑寢さる内ハ自ら房
中ふ入ることを勿れ女子よく如此ならるられハ一
家和き齊ひ一鄉自ら感化して寔ふ賢婦と稱せ
らるべし

第三夫に事る事

凡女子出て嫁ぎ妻ハ夫ハ乃ち一身の主ぬり夫
を以て天ふ比すべし夫ハ陽にして剛く婦ハ陰
にして柔なるハ天地の大義ぬり故ふ夫ハ恩愛
を主ぬり婦ハ從順を重んじて愛敬相因ることハ
人道の大經なり然バ則夫婦乃際ハ互に敬ひ重
んじて常ふ賓客の如くに接るべし夫指圖なる
ことハ一ツるられハ敬ミ聽て從ひ行ふべし夫不義

正樂堂藏版

なるときは別して物柔に諫め止むべし夫外に出ずることあるときは遠近必往く所を問ひ置べし黄昏に及んで若しも歸らざるときは燈を點じ食を調へ門戸を敲くを伺ひ待べし夜深くして尚未だ歸らざるときは人を走しらして之を邀ふべし夫若し疾病あるときは心を勞し思を焦し神祇に祈り湯藥を進め百般治療を加へて早く快復あるを祈願すべし夫若し怒を發して

とあるときは聲を怡ばし氣を下して自ら己を遣責すべし必夫に怒を抵觸せざること勿れ且又夫常に着用ある所の衣服は垢汗を穢れざるやう洗濯し補縫して時氣の寒暑に從ひ分を應じ聊か凍餓せしむることなかるべし茶飯飲食は尚又慇懃に奉對し飢渴せしむることなかれ婦よく常に心を用ひ多くは此の如くなるときは貧富甘苦を同うして夫婦和樂し一家琴瑟の如く

たるべし

第四家を營む事

凡女子人の婦となり家を營を修るときハ只儉と勤とを二つよりあるべ盡し儉なれバ家富ミ奢ゞ家貧し勤ゝバ家榮へ懶れバ家衰るときハ必然なり故に一生の計ハ勤めおのりて年少きゝ紀おゝく勤免働く者ハ百事蚤く成て一生己ゝが身を安穩ゝ保つべし一年の計を一月にあり一日の計ハ平且おのるを結ぶて常おゝく勤め働く者ハ生涯活計を誤り失ふゝと毋るべし故おゝ夫の家貧しゝれバ相共ゝ田を耕し種を播きて勞を同ゝ結ゝとゝ聊ゝ辛勤を怨むるゝと勿ゝ箕を持ち箒を擁き門庭を掃除し家室を潔淨になべし又飯を炊き羮を煮て朝夕の勤勞を憚るゝと勿ゝ若し錢穀余るゝ紀ハ收め蓄へ酒食余りあゝバ浪りに費さゞ賓客及ひ非常の需

に供へ置くべし大凡大富は天命なる者なれども小富は己が勤めなる者あて衣食豊なる足る日用缺乏なるは是平生の勤怠にある者なり故に婦人なる如此勤め働て一家營々奔走の患ひなるべきは夫婦の間常に綽々として余裕なるべし

第五早起の事

凡女子は早く起き晨く寢るを常とすべし一日の計は朝にあるなれば少なる毎且早く起るべし百事よく辨じて整ふべし起るは必手を洗ひ口を嗽ぎて早く厨房に出て菜を揀び火を焼き鍋を洗ひ鑊を磨き羮を煮飯を炊ぐべし一家の資産は固より富て豊なるものと貧うして儉なる者との分辨なるは飲食の設けも自ら多少美惡の異同あるこなれば必然なるべし大凡蔬菜を用ひ茶湯を煎じ或は蒸者又は煮る者を認るにも

各其味を甘旨ならしめまゝ碗碟の類ひハ須く潔淨ふ列祢舗くべし三飯を設くるふハ必び時を誤るもとれく朝晩相均しゝやうに心を用ゐるべし食事畢るゝハ各々女子の工事ふ就隨ひて苟も怠り縱まゝなるもとあるべし是也即ち晨を侵し早く起るを以て百事よく辨治を為ゆえん也

第六學作の事

凡女子ハ女工を學ぶこと尤も肝要なり麻を紡せ苧を緝こと一々法の如くなべし其業已ふ畢ぬるバ紡車を用ゐ紗線を紡し機杼ふ上せく布を織べし又桑を操り蠶を養ひ繭を煮柘を摘み雨を看風を占ひ風雨濕滓あるゝハ其筐を換へ置くべし霜露寒冷なるときハ炭火を用ゐて烘焙をべし飼ひ養ふもと方ふ時候を推察し苟も飢飽の傷ひなくしむること肝要なるべし蠶既に

繭を煮てこれを絲に繰りて經緯を分ち織て帛とすべし余暇には尤も衣服を裁製し鞋襪を縫ひ綴り總て針線の技を習ひ熟すべし女工善く熟するこれを衣服補綴の愁ひなく一家窮乏の歎き無るべし

第七禮を學ぶ事

凡女子は礼法を知らざる能はず女客来るこれ〳〵ばまづ至らざる内は先ず堂室を洒き掃ひて坐席或は飲食の供具を注意して豫め整へ治むべし客至れば衣服を理め正し容儀を肅み整の一静ぶ歩み言語必ず低静にし客を迎へて坐席に就し先ず彼の起居安否を問ひ寒暑の時候を叙て往來酬答乃儀音問疎闊の情を述るこれは丁寧に應對順序あるべし茶菓を供へ酒食を具へ送り迎へ献ず酬るに間なく從容として礼節を守るべし

第八待客の事

凡人の家ふゝ自ら賓主ありて客若し來り夫を訪ふことあるときは坐敷を掃拭し茶煙草盆を備へ款待慇懃ゝ家の貧富に隨ひ飲食を調和し器具を清潔にすべし客見て之を賛嘆せざるバ家風大いゝ光ありて客若し日暮て尚未だ帰らざるバ燭を點じ燈を擎げて厚く之を待べし夫若し外より出るに當りて客の來ることあるときハ先ッ婢僕をして其姓名及び何の事故ありて來るやを問ふべし客名字を通じて長上智音の對面すべき者なるバ延て之に應酬すべし客若し對面に及ばざる者なるバ婢僕ゝ令し茶菓を出し礼節を厚うし其姓名を記し其用事を詳ゝゝ聽置て夫の帰るを待て分明ゝ之を陳説すべし若し又己が用事ありて親戚知音の家に往くことあるときハ亦宜く礼法を守るべし相見て

茶を傳へ而して後問ひ候ふこと前の如くして
用事達し畢らば速やに挨拶して帰るべし若し
主人慇懃ふ留むるあるとても酒を飲まず唇を
沾すまでにして面貌醉態を顯はすに至るまでは
勿論食物多品ありとも筋を乱して貪り食ふこと
なかれ主人強て盃を加ふるも身を起して固く
辞退すべし必ずしも長坐雑話して人に厭るる
こと勿れ

第九母儀の事

女子嫁して子既ふ生るる時ハ幼稚の内乃訓誨ハ
専ら母儀にあるべし子を訓へ導くふハ嚴
に德義の道を以て之を養育し廉遜の節を以て
之を率ゐ勤儉の方を以て之を導き慈愛の心を
以て之に臨み朝夕勤め動ふしむるにハ專務の
事を嚴重ふ教示し其他門庭を掃ひ洒き學文諸
藝術を教るにハまづ母たるものハ其子の模範

とするものゆゑよく己が德性を虧さるゝなり
肝要とすべし女子の德性は他にあらず貞と信
と孝と慈とを四つ為り貞信孝慈をもつてよく
其身を守るなれば子皆之を倣ひ之に法るなと
勞せずしてよく自ら意の如くなるべし是世人の母
たる者第一の心得べきなり

第十節　貞を守る事

古來賢婦烈女は其名青史に輝やき芳聲萬古に
標はせる故に女子たる者須らく勉めて之を倣
うべしその倣ひ法ることは敢て高遠なるにあ
らず人々の行ひ難きなとなるにはあらず特に清貞を
守ることなれ肯要とすべし蓋し清なれば身體清潔
にして志行明らかなるなり貞なれば節操堅
固なるして身榮へ名輝くことを得へし平生の心
得方は室内に居て女の務を行ひ妄りに門戸を
出入せるなと勿れ坐するに膝を動かすこと

なく歩行せるられい頭べを回顧せること勿れ
喜へ必ず大ひに笑ひ怒ど聲を高くせず偏
癖の言を發せること忽ち邪淫の音を聽こと勿
れ女子よく此の如くなるられい端莊正大あ
く人の模標となるべし若し不幸にして夫早く
死亡せるられい痛哭悲傷して喪を服し祭を厚
くし志を守り心を堅うし身を終るまで家業を
勤勞し日夜慇懃に子女を教育しよく先人の志
を承け嗣ぐしむべし婦よく此の如くなるとき
は存せる者沒せる者相共に光り榮えて賢婦の
名不朽に傳ちるべし

同下編

第一不孝を戒める事

女子の不孝なる者は父母を敬ひ愛むの心薄く
して己が情欲を肆まゝにするものなり故に己
れに落度ありて父母若しこれを異見せる時は忽

も慍み憤り肯て服し従ひ其いまゞ嫁せゞして家にあるときは衣服髪飾の華美を競ひ求め已が嫁しく人に適んとするときは嫁資の多く完備せる事を希ひ望み又出て夫に従へば偏り夫を向ひ慕ふようして却て父母を親しみ愛まゞ甚きに至りては父母不幸にして死亡ありしを玉へば密に彼是と兄嫂弟妹を讒言し父母乃遺財衣服を捜り求め爭ひ貪り聊の哀み傷むの容色なし此の若き婦人は其惡きこと豺狼に均き者あり宜く深く戒むべし

第二不賢を戒める事

婦の舅姑に順はざる者は尊長の前を憚らゞしく傲慢無禮或は才智技藝に誇り高ぶり又は苦辛勤勞の事を説き話り舅姑喚びて事を命ぜるとも更に其使令を聽き従ひ舅姑飢寒の苦みありとも敢て之を顧み念ぜゞ此乃如き婦人

も天地も容ざる所ゆえ責罰身に加ふるこゝろい
悔とゝ及ぶ可らを者なり宜く深く戒めよ

第三不順を戒める事

女子嫁すれば夫婦の好を合ふと身を終るまで
固より離るゝこゝろ然りと雖も親しゝ狎すぎ
て礼節を失ふときハ馴を戯るゝ患ひあり馴を
戯るゝ心互ひに生ずれば語言驕慢なり語言互
に過ぎバ放縱怠惰に流れて夫を凌ぎ侮るゝ心
を生じ夫を侮るゝと數々なるを諫め訶らるゝ
るに至るべし諫め訶らるゝ時ハ速に聽き從
ハざるこゝろい鞭笞之に及んで遂に恩義を忘る
るの患あり故に夫婦の間ハ恩義兼備するを肝
要とすべし孔子も夫婦別なりと曰へり必ず狎
を侮るゝ振舞あるこゝろ勿を

第四不睦を戒める事

女子嫁して夫に愛せらるゝ時ハ舅姑の己を

愛するによりて舅姑の己れを愛するこゝろに叔妹の己れを譽むるによるべし故に家内和ぎ睦まゝれば内外の誹謗も自ら掩ひ藏して同心の間は真に水と魚との如くなるべし然るを愚なる女は叔妹を扱ふに叔は於て己が嫂たると高ぶる妹に於て夫の寵を恃みて驕慢なるより恩愛互ひに乖き離して其謗りも自然内外に廣まり舅姑に怒り夫主に恨み恥辱其身に集りて其心配遂に父母に及ぶ婦たるもの心得に常に叔妹と相和ぎ合ふことを主要とすべく苟も驕り慢るの振舞あることなかれ

第五　母訓を戒める事

女子の不賢不正なることなるに母の訓一に至らざる所あるがゆゑなり寵愛に平常厚く加ふるも我儘を放恣を許し事勿れ故なくして啼き號ぶることなるこれに長大にしてく怒の性

を養ひ子の患となる慢言多辯なるものを禁ぜざるべからず嫁して翁姑を輕んじ侮り夫を欺き詐る惡事を生ぜ我侭の遊歩を許すこと勿れ淫情氣儘の過を生ずるものとなり然る愚なる母の寵に惑ひ愛に溺れて女子を教ふるに礼節作法を等閑なるゆゑ畢竟女の礼儀を知らず漫りに爭ひ喧くして遂に尊長を輕蔑して人に嫁すること婦の道を守らず大いに家政を乱して其禍遂に父母に及ぶ是即ち母訓の正しからざるゆゑなり人の母たる者は愛に溺れて必ず訓誨を忽せにすることなかるべし

第八懶惰を戒める事

凡女子出て嫁する時は懶惰の性を肆まゝにすることなかれ小より積んで遂に一生の恥となるなり揔て若き時より讀み書き縫針等をも事ならせ養蠶機織に勤めざして女の仕事甚だ拙

おれば舅姑ゐ賤めらるる他人ゐ輕んじ辱らる此の如き者ハ特に舅姑夫主の衣服を裁縫せ弟夫と能ハざれのみならず自己乃衣服も破るる綻び西に牽き東ゐ絡ひ衿を乱し肘を露ちて人に指し笑はるるに至る懶惰の癖い女子尤も深く戒むべき所なり

第七傲慢を戒める事

女子の高慢なるい甚ず家風を害ふ患ひあり客の來るを見ても或ハ箕坐し或ハ卧しなるまゝにて之ゐ應接し容貌無礼言語粗畧客もし問ふ事あるとても欺て知らぬと詐り客の貧賤なる者来れば侮慢輕蔑至らざるれし或ハ又己れ他人の家に往くあるとなるらるも坐席放縱更に忌憚る容色なく茶菓を貪り飲食を肆まゝ酔へば言語を妄りにし行歩も正しからぬして傍人に惡き賤まるる者あり是れ傲慢の癖乃害

を身に及ぼす所なれば女子宜く深く戒むべし

第八晏眠を戒める事

女子眠を貪る癖ある者は毎日の生計をも顧みず念もなくて唯眠るこのみを好く黄昏已に寢に就くなる日高く上りて猶未だ床を離れず父母舅姑の咤々にいたるまでなるときは自ら起るおとなく晏き式慚ぢ惶れ容顔盥ひ漱くも遑なく足垢付き汚れ塵まみれ厨房に出て茶を煎じ飯を炊き時限に及べざる式狼狽するに至る是れ一惰の癖よりして百事倶に廢棄す欲る為る者なり又一等飲食を貪る癖ある者は未だ尊長なる饌へざるに先づ餔ひ啜り爭ひ嘗め或は炮き煮ざる内私かに竊に藏ぢ者あり是れ唯自己の享食を量る而已なく父母舅姑の奉養を聊か顧ざる者なり尊長之を察覺するとき怒を蒙むる人の談笑する所となる僅に一口を愛し

て終身を汚し辱しむる吏ハ豈ゆ羞かしき事ならずや女子宜く深く戒むべし

第九失礼を戒める事

女子礼節を守らざる者ハ閑暇あれども家務を理めず故ゆ客来るときハ茶湯備つべき支若し客を留るこゝあるときハ婦怒を含み奴を打ち婢を罵るに至る飲食を饗せるときハ鹽なくまた鹽なくて酢あるこゝ是ゆ夫主ハ慚惶を増し客ハ羞怒を懐きて大いゆ家名を汚し辱しむ女子宜く深く戒むべし

第十恣言を戒める事

女子の不賢にして多言の癖あるものハ好んで事の得失是非を論辯し或ハ人の言語を以て眞偽を弁ぜず妄りに低抗争論し尊長ゆ觸れ犯し親戚ゆ違ひ戾て隣里をそしり朋友を罵て朝と

ちく暮ゝちく近隣ゆ走り遍く言談縱ゝて更に忌ゝ憚る事なき者あり此の如き婦人い多く人の怒罵を招き引て畢竟自己の一身を傷り害ふ結ゝあゝび父母に羞辱を貽さゝ至る此の如き婦人ハ犬鼠ゆも如くちとなるんや女子たるものゝ尤も深く之を戒むべゝ

婦身女大學下編

上篇　第一

寢室　安否　暖　熱　枕席　涼　饑　渴　適　言語　平常　麁略　況　訓誨　遵　違背　過失　譴責　從容　嗔責　免　注意　高年長壽　飲食　甘美　輕暖　百事　缺乏　母　疾病　朝暮　神祇　藥餌　快復　哀痛　愁歎　葬送　祭祀　誠敬　恩德　忌日　追膳　哭泣

第一

嫁　舅姑　主　貴賤貧富　恭　敬　亦　方　低　面貌　應答　使令　聽從　毎且　庭堂　洒　潔淨　高言大聲　熟眠　盤

楊枝齒磨盥嗽清淨熟潔奉歡房中一
鄉感化寔賢婦

第三

夫比多恩愛從順愛敬相因大經
際賓客接指圖不善黄昏燈點
邀疾病焦神低湯藥百般快復
祈願怒怡譴責抵觸着用垢汗
穢洗濯補逢時氣凍渴慇懃奉
對飢渴貧富甘苦夫婦和樂琴
瑟

第四

營奢懶衰必然計少蚤安穩
平且生涯活計耕播辛勤箕擁
門庭潔淨炊羮勤勞憚浪鈌乏
營々奔走綽々余裕

第五

晏毎且整嗽厨房揀鑊羮資
産分辨異同蔬菜蒸甘旨碗碟須
朝晩相均工事就隨縱晨侵辨治

第六

女工肝要紉苧緝紡車紗線機
杼繭柘摘占風雨濕淬烘焙搥
察繅經緯帛余暇裁製鞋襪針

線 熟 善 補 綴 窮乏 歎

第十七

礼法 堂室 洒 供具 注意 理 肅 容
儀 低 静 起居安否 叙 音問疎濶
應對順序 酬 礼節

第十八

賓主 訪 掃拭 款待慇懃 調和 賛嘆
擎 婢僕 事故 長上知音 延應酬 令
陳説 親戚 候 挨拶 唇 沾 面貌醉態

第十九

貪 長坐雑話
幼稚 訓誨 母儀 養育 廉遜
倹 慈愛 教示 洒 摸範 虧 貞 信

孝 茲 倣 法

第二十

賢婦烈女 青史 芳聲 標 須 特
清貞 旨要 志行 節操堅固 室内 皿
顧 偏癖 邪淫 端荘正大 摸 標 不幸
痛哭悲傷 勤勞 先人 不朽

下

愛 情欲 肆 慍 憤 髪飾 華美
適 嫉妬 資 完備 偏 兄嫂弟妹 讒言
遺材 搜 容色 豺狼 戒
舅姑 尊長 傲慢 技藝 苦辛勤勞
使令 容 責罰 悔

第三

好　礼節　驕慢　放縱　怠惰　凌譴　訶
鞭笞　兼備　狎　侮　振舞

第四

愛　舅姑　叔妹　譽　和　睦　誹謗
藏　同心　愚　叔　嫂　寵　恃　驕慢
乖　謗　夫主　恨　恥辱

第五

不賢不正　訓　寵愛　我儘　號　長大
慢言多辯　禁　翁姑　侮　詐　遊歩
淫情　過　惑　溺　等閑　畢竟　漫　喧　輕
蔑家政　禍　訓誨　忽

第六

懶惰　養蠶機織　賤　辱　特　裁縫

自己　綻　牽　絡　衿　指　癖

第七

高慢　家風　箕坐　容貌　粗略　貧賤
侮慢　輕蔑　放縱　容色　行歩　傲慢

第八

生計　念　黄昏　吃　晏　慚惶　盥　漱
遑　汚　厨房　炊　狼狽　廢棄　貪　饌　鋪
啜　嘗　炮　竊　享食　量　奉養　察覺
談笑　終身　羞

第九

閑暇　理　怒　含　罵　饗　筋　匙　慚惶
羞怒　懷　汚　辱

第十

得失是非　言語　眞偽　弁　抵抗　親戚

違戾罵遍縱怒罵畢竟善辱

貽犬鼠

俑身女大學

明治十年八月

出版人　東京府平民　内田彌兵衛

第一大區十三小區
横山町二丁目十六番地